

眞生

第 二 卷 五 月 號

概念を破れ!

□宗教の祖師とも云はれる人々は多くは舊式の概念を打破つて新なる眞實の宗教に生きてゐる。然し念の人々とはどうすれば先師の法語に捕はれて言葉の概念ならうとする。□然らば眞實の宗教ではない、尤も先師を尊ぶ心からさう成らうとするのも無理はない。けれども事柄が信仰でないことはどこまでも知らねばならぬ。□眞實に生きた祖師の言葉は祖師その人の體驗の顯れである。故に吾人も其の體驗に到らざる限り決して祖師の言葉が心から理解せられ得る者ではない。□釋迦孔子キリストを見よ、彼等は如何に自己眞實の信仰に生きしかを。而して其他一宗一派の祖師と云はれる眞實の人々が如何に自己眞實の信仰でなければならぬ。□故に吾人も祖師の法語や先師の言葉に捕はれず何所までも祖師と等しい體験に到り祖師と等しい信仰に生きねばならぬ。單なる法語に捕はれ單なる祖師の形式を模倣するのは眞に生きた道でない。□宗教は形式ではない。宗教は概念ではない。要は眞實に生きた人が爲めである。宗教は概念ではない。此の概念を打ち破つて眞實に生きたる所、そこに如來と不二なる眞實の世界は輝いて来る。(念)

世 態 と 宗 教

眞 生

▽妻や子供に捲き付かれ、損得だと算盤商賣に日を暮らしてゐては連々宗教には這入れぬ、信仰も起せぬと限たものだらうか。左う云ふ世間道を離れて別に聖い宗教生活てなものがあつたのだらうか。金儲けも己め半殺の蛇の様に柔和しくなるのが宗教道か。不徹底な無抵抗主義なら外道以下である。

▽俗世間を捨てた御出家ばかりが宗教人の様に今迄は考へられた。然し妻子を捨て又始めから持たなくて親の情をも経験しない様な坊主や、布施で暮らさしてもつて経済問題を考へなくてすむ僧院生活の修道者達は眞の人生の難問題に初めから觸れなかつた特殊人である。到底眞實相の現代を救ふ鑑とはならぬ。又其變過去の宗教では現代の諸葛藤を悉く解決し得ない。

▽爺婆も養ひ、子も教育し、家庭を保ち生計を立て、而も其裡に本當に實のある生活をした、渦巻く激動の中に不動の夫中心あつて不滅永生の價値生活に徹したい、是れこそ眞に萬人の渴望し、又將にそうせずには居られぬ眞實さではないか、宗教はそんな遁世的回避的弱者の棲家でなくて、正に生きんとする眞人の活世界である。

▽今十七億の人間が地球上に生きてゐると云ふが茲百年も経つたら生残つて居る者は何人ある。其變短い生涯を貰て來て毎日の生活は何をして、食たり飲んだり疲れたリ休んだり、空に揚つた風船王の様に西から吹かれ東かれ、それで瓦斯がぬけたらベツタリ地に墮ちる様な一生に終りはせぬか。

▽大きい人間、完全なる人格、意義ある生活、佛としての大自覺に徹しやうと進むてこそ眞實ではないか、そして人間事象の總てを此目的完成の爲に統一し役使して行く、そこに總ての事柄總てのもの、悉く宗教ならざるものは無い、此俗世間態それこそ眞劍の宗教問題であり、宗教舞台である。

目 次

- 世態これ宗教
- 見佛の要求(二) 土屋 觀道
- 合 掌 白旗 靈光
- 懺悔錄 演 阿 彌
- 借金してゐる心持 中野 勉子

光明遍照

月影のいたらぬ里はなけれども

ながむる人のこゝろにぞすむ

春 ○

さへられぬ光もあるををしなべて

へだてかほなるあさかすみ哉

夏 ○

われはたゞほとけにいつかあふひくさ

心のつまにかけぬ日ぞなき

秋 ○

あみだぶにそむる心のいろにいては

秋のこずゑのたぐひならまし

冬 ○

雪のうちに佛の御名をとらふれば

つもれる罪ぞやがてきえぬ

(法然上人)

見佛の要求(二)

土屋觀道

乍然茲に私をして考へしむるものは此等三聖に對する見解の相違である。夫れは是等の偉人は決して單なる人々でない、佛教的に云へば如來そのものの出現で此れを應身の如來と云ひ、初めより普通の人々とは其性質を異にするものと見る見方である。又之を基督教的に云ふならばキリストを神の現はれ、神の子の出現なりと見る見方である。而て今一つは是等三聖もやはり其本質に於て等しく吾等と同じき人間である。唯彼等は吾等が求めて止まざる人生理想の神境に到達したる人々であると見るの見方である。而て此等の見方が前者であれば彼等三聖と吾等とは全々其性格を異にして吾人が彼等に等しからんとするが如き要望は全く放棄せなければならぬ事になる。而して後者に從へば吾等と彼等とは全く同格の人となり、吾等が彼等と等しき靈境に達せん事は必ずしも無謀の計劃では無い事となる。私共は此二者の中其何れに従ふ可きか。尤も此二者の見解は何れに倚るも二者各々採るべき特徴も多い。然し乍ら此二者の相違は吾等人類生活に於ける理想實現の形式に於て實に大なる相違を來す。而て私は是れを後者に考へた、何者之等の三聖が如何なる場合にも自由であり絶對である事は、彼等が天地の大道に一致融合する處に於てのみ初めて絶對があり自由がある。此外に彼等の自由も絶對もあるべきものではない。春夏秋冬の自然を見よ、如何に彼等が自然なる事よ、偉人の風光が亦自然の力ではないか、吾人は今此

自然の大道宇宙の力の偉大さを轟々と感ぜられずにはあられぬ。眞に宇宙の本體萬法の根源こそ一切諸法の生命ではないか、然して此宇宙の生命こそ又是れ三聖の所依、生命、諸佛如來の根本如來ではないか。如來より出ずる處そこに永遠の生命あり、そこに無限の向上もある。然り而て此の宇宙の靈境こそ眞に諸佛の世界であり又三聖の靈境である。畢竟天、神、佛は本體の名目に過ぎぬ、此本體の根本を一大靈體として天神佛と云ふのである。如來に一切の所依にして不所依である。即ち一切の究竟依である。三聖の所依又吾等の究竟依でなければならぬ、而て此の三聖所依の靈境は即ち如來の靈境であつて、此如來の靈境こそ即ち如來の世界であり、佛陀涅槃の極樂である。然して我等の生く可き眞實の世界とは即ち此極樂世界である、而して私の心は如來の世界を憧憬れ如來の世界を求めて止まなかつた。此時既に私は斯る理想の辿りより自己本心の要求として情意生活の靈境を求めつゝあつたのです、而も私は未だ之等の妙境に到達したのではない、けれ共此時既に私は單なる智者や學者の理智的要求では無かつた。自己自身の眞に生くべき眞實の世界を求めつゝあつたのです。而して是れ又實に私の身命を賭しても求めざるを得なかつたことである。

此時私は自ら佛たらんとも又神たらんとも求めたのでは無く、永遠の生命と意義ある生活に生きんが爲めに眞に是等に相當する歸依の世界を求めつゝあつたのです。而して其結果として此歸依の世界を宇宙に即して如來の實住を求めつゝあつたのです。夫れにも係らず私の本心は未だ全心如來を信じ得なかつた、從て又如來に歸依する事も出來ず、又事實に於て見佛の要求と云ふよりも寧ろ信佛の要求と云ふ可きであつたのです。乍然此まで來ればもう神の理解、佛の理解は已に私の信仰と一致せねば止まな

つた。單なる理性の満足丈けではなくつた。そして私の要求は神の理解佛の理解と共に更に神佛の實在を體驗したい要求となつたのです。乍然當時の私は尙ほ此れを見佛の要求と云ふよりも寧ろ佛の要求と云つた方がよかつたのです。然らば如何なる意味で見佛の要求は起つたか。

或日のことであつた、私の求めて止まなかつた此信佛の要求は忽然として私の心に充ち満たされ一種の驚くべき神祕の世界は忽然として私の周圍に展開された。天も地も一時に啓けて世は光々として慈光に充たされ、疑はんとしても疑ふことの出来ない信佛の世界は嚴然として私の心を包んで了つたのです。闇の中で考へた私の概念や假想の世界は一時に破れて彼此一切は慈光に輝く絶對世界が顯はれたのです。今迄の心の疑ひは夢の如くに一時醒めて晴やかな白晝の如き如來の世界が天地に漲り、疑ひ得ない悦びと望みの世界が忽然として輝いて來たのです。其時私は我れ知らず南無阿彌陀佛と稱へてゐた、そして我に還れば其稱ふる念佛がその儘信佛入信の姿であつた。入信の當相其儘が信佛の當體であり。又見様によりては見佛の當體であつたのです。三聖の世界も是れだと私は知つたのです。斯くして私は如來を信じた、之れから後の私は今迄の私では無かつた、明らかに如來を中心として如來に生きんとする私である。乍然此れを以て直ちに私が佛となつたと云ふのではない、否な寧ろこれからこそ初めて自己の眞價を知り又自身の罪深き事自己自身の力の足らない事も知るに到つた、而しそこには謂知れぬ永遠の生命と限り無き人生の望みとが無限の力の中に充たされて來るのを覺えた。諸佛成道の原理も此に初めて開け人類生存の意義も此に初めて判つた。而して私の世界は何等の善も力も無かつた。私が神の道に生き佛の道に立たうと此望みと努力に勤めたのも是れからであつた、而し私の力足らずして敢なくも失敗

に歸せやうとした、汗みどろ血みどろになりて凡てに傷つく私の心は此宏遠の理想高き丈けに其失敗に對する悲しみも更らに大なるものであつた。釋迦、孔子、基督の如き偏に是の道に生きた偉人である、而してそこにこそ是等偉人の偉大さである。斯くて道の外に我なき彼等の大業が神人の生活として私の心に輝いて來たのです。此時恰度私は廿一歳であつた、私が一生を宗教界に投じたいと決したのも此時でず。そして罪深く力無しと感じた私にも此の如來を中心として如來の心に生きる時初めて眞實の力を覺えた。乍然いつになつたら斯の三聖の如き眞實の生活に立つことが出来るであらうか、此意味に於ける私の心は無限の望みであり、又無限の悲しみであつた。無限の望みは人生の意義に醒めた事であり、無限の悲しみは自らの行ひの至らぬ事である。然して私と同じ理想に惱み同じ理想に生きた人を私は聖法然に見出した。釋迦と孔子と基督が私の神人生活としての理想ならば法然と親鸞とは正しく私の現在に於ける生活の姿である。

斯くて私の一生は一家の反對を打越えて遂に一身を宗教界に投ずるに至つた。乍然當時尙ほ私の信仰は未だ私の云はんとする見佛の世界にまでは到てゐなかつた。然らば如何にして私は見佛の要求を辿るに至つたのか。是れからが私の正に云はんとする眞の見佛の要求である。それは善く云へば如來の上無き恩寵であり、又偶然の啓示的出來事です。恰度私が廿五歳の時まだ宗教大學に在學中のことであつた、當時の私には初めから充分の學資もなく、實に貧困の中より辛くも老師の許しを得て通學を續けてゐる時であつた、衣食もろくに生活をつなぐに足らず、日常の營養も不足して勉學せんにも反て身心の疲勞

を覺え、心秘かに之を悲しむ時さへも度々であつた。尤もそれは單なる營養の不足を悲しむのではなく折角此世に生れた私の一生をして單なる營養不足の爲めに充分の活動の出来ないといふことが悲しみであつた。而して此の望みを充分に果すにはどうしたらいいか、夫れは偏に營養を充たすといふ事にあつた。そしてこれが何處迄理論と實際に一致すべきかといふことは勿論私には判然しない所もあつたけれども、かく迄も考へざるを得ないといふことは私の悲しい處であつた、乍然それも當時の私として僞らぬ事實である。然るに或夜の夢であつた私は急いで寺に歸るとふと玄關で老師に出逢つたのです、老師が何處に行たのだと問はれるので私は營養の爲めに蕎麥屋に行つたのですと答へた、處が此私の行爲をば靜かに夢の事どもを悲しむながら床の中で念佛申して冥想した。ふと見ると老師が多數の信者に對して説教なされてゐる、私は此時老師に向つて自分の罪を心から慚ぢて許し給へと感涙の中に祈つたのです、然るに此時私の念佛は未だ嘗て見る事の出来ない崇嚴の氣分にうたれた念佛でした、而して私の心には此時の夢の崇嚴が單なる夢ではなかつたのです。願くは斯かる心地で今世に於て眞實の如來に一度でも參じたものであると實に之が私の如來を拜み度いといふ心を起した抑々の根本でした。阿難が空中に阿彌陀佛を拜し奉つたのも此心だらう、而して私も此心から全身如來に南無したいものであると、これが私の心からなる見佛の要求となつた。今までと雖も決して如來のまします事を疑ふのではなかつたけれども、それは今度の老師に面せし如き念佛の心境に較ぶれば殆ど比較にもならぬものである。かくて私の心は今や如來そのものを求むるに至つたのです、温き心の望み老師は好意に解しては下さらなかつた、そこで私は其の賤しい心からではないと云ふことを申開うとしたけれども、老師は私の

心の通りを汲みとつて下さらなかつた、此時の私の心苦しさは全く面目を失した感でした、而もそればかりではない其時の私の服裝が夜着のまゝの服裝でしたから更らに更らに悲しく覺えたのでした。而て此時の私は今まで苦心して築き上げた私の人格が一時に破滅してもはや取り返しのつかぬと深く絶望の淵に沈んだ。此時の悲痛こそ實に私の未だ嘗て經驗した事の無い悲しみであつたのです、而しそれが夢だと知れた其時の喜び、私は此時ほど嬉しかつた時とではない。

然し私は想つた。假令一睡の夢と雖も此れは私の心の中にかゝる夢として顯はれる丈けの内在的な賤しい心があるからである。と再び私の心は悲しみの心に沈んで行つた。そして此時の私の悲しみが如何ばかりであつたかは殆ど想像外であつた。かくて私は寢もやらず夜となく晝となく私の心は

はたゞ佛にいつかあはひ草

心のつまにかけぬ日ぞなき

の法然上人のお心にも似て今更らのやうに見佛の要求が心の底から湧き出るのを覺えたのです。オ、慕はしき如來様も、靜かに想へば法然上人の見佛の要求も私と同じく信後の要求ではなかつたか。入信以後更らに上人の念佛が別時念佛として専修せられたのも決して唯事ではないのである。上人は六十六歳にして見佛せられた。而して今私は如何にして見佛したのである。今はたゞ私に於ける見佛の要求が如何にして起つたかを述べれば足る。

(大正十二年三月九日京都百山にて老師の遷化を悲しみつゝ御遺骸の側より)

合 掌

道友への進言

岐阜光明會代表 白 旗 靈 光

菩提の道を探ね求める私共が一得永不失の安心を獲てもそれは私共の實際生活の上には餘りに矛盾着な貪瞋煩惱が背反な世界に私共を誘致せよふといはします。繫縛の多い世界から自由な而も純真な理想實現の世界への道行には清淨にして坦々たる白道の歩み究竟佛の一路のみであります。私共が授戒とか傳法と云ふ言葉や傳法等の内容と共にこれを受けるのはその授戒や傳法等の内容と共に苦痛と煩惱との人間苦が本願念佛の慧光によつて佛性を開發されて行く事は遇斯光者の歡喜です。從來これらの授戒や傳法が傳習的の爲めに消極的な佛教人を粗製亂造し臭いものに蓋する様な傾向ある教誡や民衆に單なる一時的な感激を與え而も生活からは遠く離れた處に信仰を置き遊戲的にこれを弄び以て能事足れりとする、又一方に求道者

がそれに對して而もアキタラない様な態度さへもないと云ふ事が如何に變態宗教を現出してゐるか云ふ事を考へる事が出来る様であります。尺尊が定慧精進なりきとの述懐もその生活に眞實であつた佛教が今はその蔭を没して全く枯れたる曠野の寂しさの感があります。

私共の小やかな計らいを一切投げだして直ちに佛に歸命し南無佛の生活に生きる時本當に充實した實感を味ふ事が出来ます如來成佛の本願に生きる事は只この歸命の實際から生れて來るその尊さは恵まれたるものゝ喜びでなければなりません。この尊き法が今や因襲と形式によつてムザ／＼と葬り去られよふとするは遇斯光者の到底默視する事の出来ない事ではありますまいか、死を越えて立たれた法然上人の尊い人格を慕ふ時、常に私共は熱い涙と共に心から念佛が涌いて來るのを覺えます。善知識には遇ひ難し本當に如何なる幸によつてか今その遇ふ事を得たるのは、人間生命苦のどん度に徹し吉水清流の洗禮に生き本願念佛の實現生活に立たれたる土屋上人の御辨鑿に依り道

友と共に常樂の域に歸入するの喜びを得たるを感謝せずには居れぬものがあります。師上人の鋭い一七は深く求道者の胸裏を剝りちゝわれたる人間の弱點を指摘し單直信仰の生活までに私共を御引導下されたのであります。

末世法滅動亂の砌、正法は漸く陰沒せんとするに際して上人の献身的大道體驗の尊さは群生を起たせずにはやまないものがあるではありませんか私は末永く上人の御化導叱咤を仰ぎ精進生道の途に旅立たんとする時道友諸先輩の前に改めて御相談申したいと思ひます。それは上人の御健康の爲めに御巡錫中に於て規定の時間を餘暇として上人の時間と云ふものを作る事であり、時處によつて決定的には不可能ではありますが出来得る限り座談會以外の上人への會談を遠慮したい事です上人の讀書殊に「眞生」誌御執筆の時間さへも全く封せられて編輯發行等の自然に後れる事が眞生社同人等の話によつて見て一層上人の御多忙の端が思はれて御氣の毒の様です。飼ひ切り者の如くに一瞬をも上人より奪ふ事を遠慮し勝れてゐられぬ

上人の御健康に道友諸先輩と共に反省したいと思ひます。(四、十五、)

焰

▼愛は内的生活を高め廣め温めるものである地上の二つの魂が抱き合つて一つのみ佛を理想としての完全な人格を創造して行く呪咀と怨恨と苦惱の猛火に包まれ乍ら二つの魂がより堅くより正真に健かな白道を歩むは只祈あるのみだ祈りは戀を淨め愛を創造する。

▼愛人と共に佛の理想に生き得る生活は輝しい一の人格として反の兩映を持つ人、人間宗教の究竟である、人間文化の至上であり又、信仰生活の熟果である。

▼愛人を愛する事がそのまゝ自己を愛する事であり自分の行く道が愛人の本當に生きる道であるならばそこに創造愛は進化して行く、けれ共創造愛は甘い陶酔的なものではない十字架を負ふた難行道であるのが普通である。

▼祈り。祈りは創造愛の原動力である(道)

懺悔錄(續)

演 阿 彌

私の唯一なる本地寂光の如來よ。如來様は常に私を勵まして早く早く此象牙の塔から拔出る様にして居て下さいませ。然るに私は何時迄も腐甲斐なく愚圖つて居るので御座います。噫々私は私の上に何處に飽足らず思つて居ました事でせう。もう永く永く先入主となつて居る見佛の要求、其要求の爲に努力する一念の繼續、而かも其繼續を裏切る雜念余念、などを取去らふと思つた事が矢張迷ひであつたのかも知れませぬ。夫でも御蔭様で二日目よりは三日目、三日目よりは四日目と段々雜念も薄らぎまして全く御念佛に凝り入つて居る時もあります。すつかり六字に思入つて余念のなくなり切つて仕舞ふ時もあります。然し乍らもう度々申上げました通り、畢竟は精神統一境に於ての見像を望む手段として稱名して居つたので、唯だ自己思惟の三昧に外なりません。極言すれば概念の中に輪廻して居るのに過ぎませ

んでした。御念佛して居るつもりですけれども實は御念佛ではなかつたので御座います。確か四日目の午後の休憩時だと思ひましたY市のU様が「失禮ですが御僧侶方の御念佛は多くは自力念佛で、己の念佛で佛を叩き出さうと云ふのだから駄目ですよ。本當に如來様に縋がる事が他力なのだに夫を自力でやらうと云ふのだから困まつちまう。私も自力に逆戻りしてすつかり如來様に脊負投を喰つた事があつた。本當に自力では駄目ですよ。」と云はれた時、身慄ひする程痛切に、「本當に然様だ。私も自力はすつかり捨て仕舞はう。本當に本當に自力には私も懲り果てた。もうとうに用心の工夫には厭き果ててよい筈だつたのだ。然様だ。もうすつかり他力に任せ切らう。本當に任せ切らう。」と思はずには居られませんでした。私の鬚剃は多分此日に行はれたかと記憶します。とにかく一分心に會得がいつた様であります。偕て御話は四日目五日目と續けて如來慈光靈化

の實際が常に私達の上に行はれて居る事に就て、懇ろに説かれまして私の宗教的情念が段々に呼起されて行く様でした。此日あたりは遠國の方方も聞き傳へて御出で下さいましたので、本當に思ひがけなく賑かな別時が營まれ、念佛の聲四隣を壓して眞劍の氣分は堂内充に満ちて居りましたから非常に嬉しくて何だか他報土の聖衆方が如來様の聖業の一としての私の解脫行に賛助しに來て下さつたかと思はれるのでした。「他力にまかせ切る! 噫々さるにても私の難行道よ!」

私は悲喜相半ばした心で殆んど一生懸命になつて居りました。而して本願其物の本質は判らぬけれども、もう實際自分と云ふものを押へつけて唯だ如來本願力に一任して居るかの様に用心し乍ら御念佛して居りました。五日目の午後二時頃でありました。すつかり雜念も余念も起らず唯だ南無阿彌陀佛の念丈で、其一念に凝入つて居りました。どれ丈時間が過ぎましたか其塵事など無論判りません、唯だ一心に念佛して居りました。余念が起

つて居ないと云ふ事丈は、はつきり判つて居ます而して其事が程よい快さを伴なつて居た事は否定する事が出来ません。木魚も聲も順調になつて居たのでせう。外の事は一切忘れ果てて唯だ一心其物でした。もし説明的に云ふと、我をさへ忘れ果て、唯だ申して居る念佛と夫を聞いて居る感覺とが有つた斗りなのでした。暫くかう云ふ時間が續いて居ました。……途端、上人の木魚がボンボンと半間を打つて、此調和した全體の空氣を亂だした時、ふつと

「ああ。此念佛も自力だつたのか。すつかり自分を捨て果てたと思つたのに之も自力の念佛であつたのか。ちつ。なさけないッ!」と思ふ瞬間に私は深い、谷底に落墮して仕舞ました。ズンと深い深い底に落ちて仕舞ました。本當に此身體が落ちて仕舞つた心でした。「あゝ絶望だ。絶望なのだ。もう之以上には方法はない。之以上に私を殺す事は出来ない。ああもう絶望だ。かく迄苦心しても苦心は終に水の泡だ。ああ残念だ。残念だ。ああ情けない。おあ何と云ふ

情けなり事だらう。あゝ裂けよ此胸！。くだけよ此骸！。破れよ此血！。死ねよ此心！。あゝ不甲斐ない奴不甲斐ない奴。何と云ふ不甲斐ない奴だあゝ残念だ。残念だ。情けない。情けない。私は終に私に死ねないのだ。あゝ私は終に救はれないのだ……」。

今でも此時の事を思ふとおのづから氣が引締り而して悲痛の感を繰返します。私は暫くは恨めしき涙の中すっかり沈み果てゝ居りました。木魚は叩いては居ますが唯だ隋性で動かして居るのに過ぎません。無論念佛どころではなかつたのです。

「あゝ何と云ふ情けない者だ。長い間苦心に苦心を重ねたのに、あゝ凡ては水の泡だ。もう方法は盡きて仕舞つた。工夫は盡きて仕舞つた。之以上に自分自身は殺せない。あゝ情けない。何と云ふ者だらう。噫ゝ私は救はれないのだ。救はれないのだ。噫ゝ救はれないのだ……」。

暫くは悲痛の涙にくれて泣いて泣いて居ましたが不圖如來様の本願力と云ふ事が心に浮びました。而して大慈悲が思ひ出されました。

「おゝ如來の本願力よ。何だか思はれない事だが若し有り得るならばかゝる時現はれねばならぬ。今の私の上にこそあらねばならぬ。おゝ大慈悲よあゝ大慈悲よ。今の私を救ふこそ大慈悲の最も好き時節であらうものを。もし今の私を救はないならば大慈悲はあり得ない。大慈悲も嘘だ。本願も嘘だ。……嗚呼私は解脱する事が出来ないだらうか。否な、私は救はれないのたらうか。嗚呼情けない私よ。あゝかゝる時如來様に遇へたらばなあゝ。おゝ如來様遇つて下さい。噫、逢つて下さい。逢つて下されば解決はつこのです。嗚呼するにても戀しい如來様。戀しい如來様。あゝ戀しい如來様……」。

かう思ふとムラムラと胸の中に何物かが湧き立つ様な思ひが致しました。湧き立つ回心の情緒！。戀慕心か、將た欣慕心か。何かは知らず。瞬間に雲と卷き湯と沸きました。不思議なる哉！。不思議なる哉！。スルスルと浮き上る様な心地がして、ホツと一息つく、氣も輕やかに身も浮き立つて何かは知らず。

「如來戀し」。

の感情は遺瀾なき淋しさと、云ひ知れぬ長閑けさとの淡いあはれ喜びがありました。如來様の慈悲が胸の中に宿つたと云ふのでありませう。如來攝取の光明の中に這入つたと云ふのもありませうか。何とは無しに思はるゝ私と如來様、私と大慈悲、私と本願力、唯だ廻り燈籠の様にくるくると同じ事のみが思はれて深い深い思ひに沈んで居ました。何か知ら御話も初まつた様ですが、遠くの方で然も自分も其仲間の一人ではあるが、何だか遠くの方で御説法が行はれてゐる様にしか思へませんでした。上人の御聲は唯だ私の耳を掠める斗り……不圖、

「茲にも一人成功しかけて失敗した人が居る。」

耳元に響いた此聲に私は愕然として我に歸りました。

「オヤ私の事か知ら。私が今思ひに沈んで居るのを見てかく云はれたのではないか知ら。否な々々私は失敗しては居ない。少くとも成功しかつてゐるのだ。おゝさうだ。私は今救はれたのだ。如

來様の慈悲に觸れたのだ。自分に死んで他力に話返つたのだ。嗚呼如來様よ。今こそ私はアナタを信ずる事が出来たのです。今こそ攝取の愛の中に這入り得たのです。今こそ私は救はれたのです。今こそ如來様が私の中に宿つたのです」。

かくて上人の御話が如來の大慈悲に就て細説せられた時私の心の上に益々入信の自覺をあげやかにはつきり悟らして下さいました。御話が終ると其儘、隣のU様の膝に

「嬉しい」。

と云つて獅噛み付いたのです。U様よ。どうぞ御許し下さいませ。私が大兄に獅噛み付いたのはかくの如き心理の上からであつたのです。偕て庫裡に下がると上人へ三拜致しました。私は嬉しいけれど淋しい。淋しいけれど嬉しい。一種悲壯にして嚴肅なる心で獨り靜かに泣きました。實を云ふと三日目あたりから御飯も進まず自然に涙が出て、懸けて居る袈裟はビタビタによれて居ました。ハツケチも一二度取換へました。然し今日唯今の感じは知る人ぞ知る。入信の人の必ず同情の

涙に泣いて下さる境で御座います。其の晩の御念佛は唯だ嬉しさで一坏でした。唯だ譯もなく微笑まれる心が溢れて余念雜念が氣がゝりになる様な余祐はありませんでした。唯だ觀喜其物であつたのです。夜の枕についてからも私の耳には本堂の方に勇ましい木魚の音が聞えて私の心は私の身體から離れて本堂に行つてました。眠る事さへ忘れて唯だ一心に嬉しい心丈で御念佛して居ました。翌六日目は多少感情も落着いて來ましたと見えて四日目五日目の御話が耳の中から喚起されて大に考へざるを得ませんでした。

「信仰とは救其物に這入る事ではなくて救に目覺めて今迄拙なかつた自分の改造にいそしむ事なのだ。私には到底出來得ない私の改造が如來様中心に行はれる事なのだ。而して其根底を先づ握り得たのが入信の初位なのだ。私は今其初位に居るのだ。私は今私の立脚地が僅かに見付つたのに過ぎない是から正しく私の眞實生活が初まるのだ。是から一步一步確かな足取りを初める事が出来るのだ。」

如來様が常に私を一人子として私の改造に心掛けて居て下さる其大慈悲に氣付かして頂いた事其事が復活であり更生であり入信であり往生であるのだと云ふ事が一分判つて參りました。私は今迄の先入主が取れなくて行くのと來るのとの違ひが判らなかつたのです。だから何事も自分本位にしか解釋しなかつたのです。噫々何事も夢でした。迷ひでした。噫々。

愛の園圖書館への寄贈

圖書三百冊土屋觀道氏。同五冊神谷善之進氏。同八冊大谷啓成氏。金一圓池田喜市氏。七圓五十錢某氏。百圓某氏。(以下次號)

自由俱樂部より

揭示傳道用の揭示板は御希望の方が多いため全部の方へ差上げる資力が無く爲に成る丈け實費支拂下され度、一枚三圓と圓五十錢他に送料です、揭示文は御知らせいたします。

借金してゐる心持 (一)

中野 冠子

私は嘗て或主人から少しばかりの金を借りた事がありました。初めの約束は私の事ですから月附にして返す事にして二三箇月の中は拂込む事が出來ましたが、其後になると段々其他への支途が増えて來て、拂はぬつもりでは無いがつい流用せずに居れぬ様な事情に迫られて、濟まんとは思ひ乍ら返金が怠たり勝ちになりました。かと云ふて別に催促がましい事などは云て來られぬが。催促を遠慮して下さる様な間柄丈けに拂へぬ事が一層自分に心苦しくてならなくなつたのです。ある時何かの序に友達に此借金してる苦しみを話した時其友は大變同情して即坐に俺が拂て遣らうと云ひ出しました、かと云ふて私は代て拂て貰ひたさに其軋事を話したのでもないから折角の親切だが止して呉れと頼んだ、假令友達が私の代りに主人へ返済して呉れても矢張り私は友達へ此度は返へさすには居れぬ、一人ならず二人へまで厄介かけて

は濟まぬと一層苦しみを大きくする丈けであつたからです。

すると友達は何て怒る様に人の好意を拒む奴があるか、俺は君から善く思はれたいと思つて俺が金を出すと云ふのでも無い、又お前が内心拂て貰ひたがつてゐるだらうと輕蔑して此事を言出したのでもない、俺はお前の話を聞いて聞捨てにされぬ自分自身の責任を感じたから俺は拂ひたいのだ、俺は君の爲めに拂て遣るのでなくて今の場合拂はずに居れぬ俺自身の心持の爲めに此一事を遂行したいのだ、今君が俺に拂はせないと云ふのは却て俺を侮辱するものだ、俺の權利侵害だ、君は濟まぬと思ふなら濟まぬと思つてゐるさ、返済したけりや返すさ、それは君の勝手だ。而し自分の感じの都合で俺の領分まで障げ、俺の自由をも邪魔せやうとするのは却て失敬だぞ、馬鹿遠慮と云ふものさ仕うか俺が好きでする事は黙て見てゐて居れ、そして君の立場で進んで行て呉れれば良い、それが本當の道ぢやないか、仕うか悪く思つて呉れるな俺のいつもの一徹だから——と云て呉れました。私

はもう是れには返へす詞も無く、それでは君の爲たい通りにして呉れと放て置ました。

それからと云ふものは此友だちの心に泣かされて奮ひ立ち漸と金を整へて早速返しに行きました。そして喜んで呉れよ漸と金が出来た、君の一言で却て早く金が出来た、誰に借りて来たものでも無く立派に俺の腕から生み出したものだからと其金を差出しました。其時の嬉しさ、心の晴々しさは未だに忘れられせん。

友も自分の事の様に喜んでさうだつたか其れは良かつた。それでは有難くお受けせやうと頂いてすぐと又此方へ折返し、此金で以て一つ頼みがあると云ひ添へました。——それと云ふのは俺も主人から頼まれた事があるからさ、俺が金を返しに行たら主人はそれは親切にと悦んで受取るなりすぐと折返し、仕うか此金で他に金で困つて居る人があつたら裕に返した積りで其人へ貸して遣て呉れと頼まれた。それで今俺も其筆法を真似た譯でも無いが、あの主人に化せられて俺もそうせずに居れぬ氣持がしてならぬ、それで俺も君に預け置

くいつ誰が誰の厄介になるとも解らぬそれだけの愛でも實行し得る間は實行しやうぢやないか。と云ひました。斯くして主人の愛は一人より二人、二人より三人へと傳へられて來ました、私が後に禮に行たとき主人に私は假令金を受取て下さつても御主人の親切丈けは永久に返し切る事は出来ません、私はいつも借人のつもりで遣て行きなす云つたら、さうだいつも借りてゐるつもりで忘れぬ者丈けが本當に金を返してゐる人だ、もう悉皆り返し切たと威張てゐる奴なら却て返し切らぬ奴だ裕の心持を汲取て納と一つになつて呉れた人こそ何より金を呉れた證據だ、金貨の受渡しなんか枚末の問題さと意裏を語られた。本當に私は此言葉の裡に佛を見、人格の上に佛を拜がまずには居れなかつた。

此小事件は私には最も大きい影響を與へて呉れました。信仰上の心の持ち方にも三通あると思ひますが、其三つが識らずして此内に續り込まれてゐました。

一、俺は悪くないが、世間の奴等は皆悪い、社會

は間違ひだらけ誤りだらけで正しく俺を批判する標準とはならぬ、俺だけが眞實で他は取るに足らぬ、俺を知るものは俺だけで、自分こそ本當親切だ正直で至善である。とする俺が主義で親でも先生でも子でも妻でも喋舌り倒して自分の考が一番良い様に思てゐる獨尊主義である。即ち自分ばかりを見て他を見得ない、内のみを見て外を知らぬ半自覺である。

二、初めの考へが悉皆り變り、惡と思た世間、他人が見返せば皆我より善人ばかりであつた。愛に充ちた恩寵の世界であり矛盾不調和と腹立たしかつた一切が悦ばれ受け容れられて、だゝ有難い此慧まれの裡に自分一人が悪かつたと改めて悔ひて自ら淨まらねばならぬと泌々自己罪要に醒め氣附き、嘆きの中にも無限の法悦に引立てられ育てられて行く時である。

三、自分を深く頼み過ぎて傲慢にも終らず、かと云ふて改まらぬ自己の罪惡に嘆いて自屈自殺にも終らず、前の二者の様に一邊を見てゐるのでは無く、眞の自己を知ると云ふのは救はれそうにも無

き弱き自己の裡に救はれの強き自己を感ずる事であり、一切世間相を矛盾と見て矛盾に執せず、恩寵と觀して恩寵に執はれざる自由さ、即ち眞相に透徹して自己の上にも他の上にも眞の如來相を看るのである。即ち自力的他力觀でなくて他力中の自力觀、自他を絶しか唯一如來中心に一切を映現し得た境致を云ふのである。

以下此三つをもつと詳しく考へて見ませう。

編輯後に――

○裏の飛鳥山の花がもうとつくに散つてしまつたのにまだ羽織が可愛くて離されません。

○先生が大變御多忙で原稿が遅れて隨つて編輯も今月は猛烈におそくなりました歸京早々の尅兄を捉えて一漣千里で仕上げました。

○岐阜の白旗師の道友への進言は同人も賛意を表して讀者諸君と共に反省したい事です。(顯)

▲時念佛三昧會

○導師 藤本淨本上人

○日時 五月廿七日より三十一日迄

(成る可く前日迄に御到着ありたし)

○會場 福岡縣遠賀郡香月村楠橋專福寺

(香月驛に御下車のこと驛より約八

丁あり)

○申込 五月廿日迄に右專福寺へ

(小寺にて多人數收容に困るにつき

成るべく早や目に御申込被下度)

主催者

丹 波 圓 淨
倉 成 治 衛 門

振替口座東京四七貳八八番眞生社

大正十一年二月二日第三種郵便物認可

大正十二年五月一日發行毎月一回一日發行

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓

東京市芝區芝公園第十四號地九番

編輯兼
發行人

土 屋 觀 道

東京市神田區駿河臺袋町一番地

發行所

眞 生 社

東京市外西巢鴨町二七一二番地

印刷所

原 子 廣 宣

東京市外西巢鴨町一七一二番地

印刷所

無我山房印刷工場